

VIEW21

ビュー21

2012

Vol. 3

中学版

特集

「自律的な学習者」を育てる 学び方指導

対談

東京大大学院教育学研究科助教 植阪友理 /

岡山市立野谷小学校教頭(元岡山市立灘崎中学校主幹教諭) 床 勝信

学校事例

岐阜県岐阜市立東長良中学校 / 長野県安曇野市立穂高東中学校

教師としての「自信」とは何かを恩師の厳しさと優しさから学んだ

東京都中野区立第七中学校校長 宮下 彰

教科を超えた授業研究にチャレンジし、学び合える教師集団を築きたい

新潟県糸魚川市立糸魚川東中学校 柳澤 淳



私を育てた
あの時代、あの出会い

ミドルリーダーの挑戦
一前へ! 前へ!!

特集

3 「自律的な学習者」を育てる
学び方指導

4 課題整理

学習規律だけでなく効果的な学び方指導が必要

6 対談

自律した学習者を育てるために生徒の学習観を変える

東京大大学院教育学研究科助教◎植阪友理

岡山市立野谷小学校教頭(元岡山市立灘崎中学校主幹教諭)◎床 勝信

12…床先生の実践事例

定期考査も授業に合わせて変え、一貫して考える活動を重視

14 学校事例1

先輩や仲間の取り組みを通し
学び方を自ら見直し改善

岐阜県岐阜市立東長良中学校



20 学校事例2

「必要感」を大切にした授業で
学び方の土台をつくる

長野県安曇野市立穂高東中学校



24 まとめ

「自律的な学習者」を育む指導に向けて

26 資料

学力が伸びた生徒、伸び悩んだ生徒の違いとは

—「中学1年生の学習と生活に関する調査」結果から

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

教師としての「自信」とは何かを恩師の厳しさと優しさから学んだ

東京都中野区立第七中学校校長◎宮下 彰

30 ミドルリーダーの挑戦 —前へ!前へ!!

教科を超えた授業研究にチャレンジし
学び合える教師集団を築きたい

新潟県糸魚川市立糸魚川東中学校◎柳澤 淳

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて
取材時のものです。

また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製及び転載を禁じます

私を育てた
あの時代、あの出会い

第11回

教師としての「自信」とは何かを 恩師の厳しさと優しさから学んだ

東京都 中野区立第七中学校校長 宮下彰 MIYASHITA AKIRA

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、宮下校長が語る。

熱い心と冷静な対応が
生徒を動かす

教師として自信を持つことは、生徒や保護者からの信頼を得るために大切なことの1つである——このことを私に教えてくれたのが、新任の足立区立花畑中学校で、教務主任を務めていた横山武士先生でした。

「生徒に理科実験の楽しさを伝えたい」など、私には理科教諭となつたら授業で実践したいことがたくさんありました。ところが、いざ教壇に立つと、指示の出し方から注意の仕方まで、生徒との向き合い方に戸

惑う毎日でした。自分が生徒の前に立つて指導することがどういふことなのか分からないのです。最初は随分悩みました。そんな時に横山先生が教えてくれたのが、「教師としての自信を持ちなさい」ということでした。

新米の私には、「教師としての自信」がどういふものなのか分かりませんでした。しかし、横山先生の振る舞いを観察したり、相談をしたりするうちに、次第に横山先生の言う「自信」がどのようなものが少しずつ見えてきました。

横山先生は、生徒といつも本気で



みやした・あきら 専門教科は理科。国家公務員として勤務した後、東京都足立区立花畑中学校に赴任。以来、立川市立立川第二中学校教頭、武蔵野市立第二中学校校長などを経て、2011年度から現職。

1974 (昭和49)
足立区立花畑中学校に赴任。教務主任の横山武士先生に出会う

1985 (昭和60)
昭島市立拝島中学校に赴任。2年目から教務主任を務める

1991 (平成3)
立川市立立川第二中学校に教頭として赴任

1997 (平成9)
武蔵野市立第二中学校に校長として赴任

2003 (平成15)
中野区立北中野中学校に校長として赴任

2007 (平成19)
中野区立第九中学校に校長として赴任。中野区公立中学校長協会会長に就任

2009 (平成21)
全国中学校理科教育研究会会長に就任

2011 (平成23)
中野区立第七中学校に校長として赴任

*年表は略歴です

「1人で悩まず 教師同士、支え合うことが大事」



かかわっていました。「生徒に何かあれば、すぐに行動する」が信条で、問題を起こした生徒がいたら、たとえ授業中であつても即座に教室まで行き「なんだお前は！」と叱り、周りが驚くほど厳しく指導しました。

一方で、普段は笑顔絶やさず、生徒を包み込む温かな先生でした。問題を起こしやすい生徒は家庭に課題を抱えていることもあり、保護者と話し合いました。家庭の事情

で夕食も満足に食べられない生徒には、時折、靴箱に手作りの弁当を置いていました。厳しくても温かい横山先生は、生徒や保護者から厚い信頼を寄せられていました。

思いだけが先走らないよう、常に冷静な対応をすることも、横山先生の素晴らしいところでした。当時の私は、不登校や問題行動のある生徒に、「生徒のために」という思いから、よく1人で家庭訪問をしていました。しかし、保護者とうまく話が

出来ないことが多く、逆に怒られてしまうこともあり。保護者にとっては「若造のくせに」という思いもあったのでしよう。

そんな私に、横山先生は、冷静に話をするためには、保護者と1対1ではなく複数で話をする事、生徒をこのように指導していき、このように伸ばしたいと思う」という明確な方向性を持って訪問することが大事であり、そのためには、学年主任や他の教師に相談して、学校としての考えを固めてから訪問すべきだと教えてくれました。

学校の役割は生徒が安心して学べる環境をつくること

生徒を思う熱い気持ち、その思いを支える冷静さ、そして指導に対する明確な考え。この3つが揃って初めて、教師としての「自信」が生まれる。そうすれば、経験年数などに関係なく、生徒や保護者にも思いは伝わる。横山先生はそう論じてくれたのです。先生のアドバイスを実践するようになってから、不登校や問題行動のある生徒、保護者との関係は好転していきました。

また、横山先生は「1人で悩まず、

他の人に相談しなさい」とよく声を掛けてくれました。学校の帰りに飲みにも連れて行っていただき、そこでは教育論を熱く語るだけでなく、自分の失敗談も聞かせてくれました。そうした場では、学校ではうまく話せないことでも、素直に相談できたりするものです。私も、「1人で悩む必要はないよ」と、後輩をよく飲み誘うようになっていました。横山先生から学んだ数々のことは、教師人生の大きな指針となっていたのです。

今はいじめなど、学校現場での深刻な状況がニュースになることも少なくありません。学校は未然防止、早期発見、早期対応に努めることが大切です。そのための学校や教師の役割は、生徒の一人ひとりの良いところを引き出し、安心して学べる居場所をつくることだと思っております。

横山先生がそうであったように、生徒に心配な状況が見て取れた時には、その裏にあるさまざまな状況を理解し、教師が一丸となって本気がかかわっていく。こうした教師集団をつくるのが、時代を超えた今もなお、必要とされているのではないのでしょうか。

「自律的な学習者」を育てる 学び方指導

学習しているが、なかなか成果につながらない生徒。

勉強をする意欲がわかず、勉強に向かえない生徒。

生徒の学習に関する課題はさまざま。

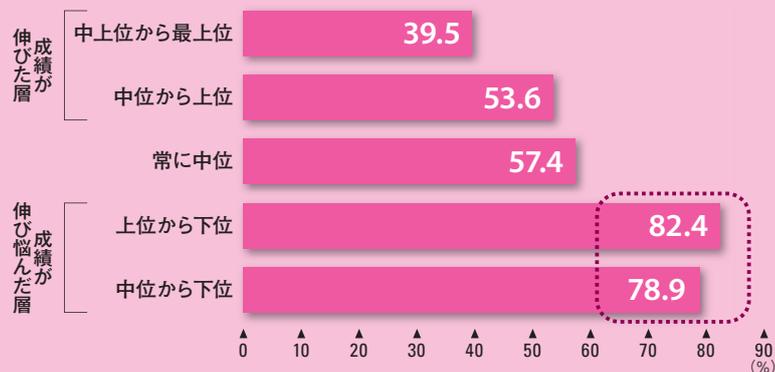
今回の特集では、「学び方」に着目し、

生徒を自律的な学習者にしていくための指導を考える。

1年生で成績が伸び悩んだ生徒の約8割が
学び方について悩みを抱えている

Q. テストの点数や成績が悪かった時、
どう勉強すればよいか分からなかった

(中学1年生1学期から1年生終了時までの成績変動別)



*数値は「とても感じた」+「まあ感じた」の%
出典／Benesse 教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)
調査データの詳細はP.26の「資料」で掲載

学習規律だけでなく 効果的な学び方指導が必要

小学校と比べて学習内容が難しくなり、授業進度が速くなる中学校では、暗記や量に頼った学習だけではなかなか成果が上がらないようだ。そこで、『VIEW21』中学版の読者アンケート、および先生方へのヒアリングから、生徒の「学び方」の現状と課題を整理すると共に、課題解決のポイントと指導のヒントをまとめた。

『VIEW21』読者モニターの声に見る

「学び方」に関する教師の課題意識

課題

1

自分なりの「学び方」はあるが、
学力向上に結び付いていない

- ◎板書をノートにきれいにまとめることに一生懸命で、肝心の授業内容の振り返りが十分に出来ていない。
- ◎学校の放課後自習室に参加し、塾に行き、家庭教師も付けて勉強しているが、いつも同じような問題で間違う生徒がいる。間違いから学び取る力が育っていないと感じる。

課題

2

与えられた課題には取り組むが、
主体的に学ぶことが出来ない

- ◎自主学習ノートに取り組ませると、「何をどう勉強すればよいか分からない」と、とにかく漢字や英単語を何度も書き写してくる生徒がいる。
- ◎失敗や間違いは悪いことだという意識が強く、自分の間違いを隠して、とにかく友だちの正解を写せばよいと考えている。

課題

3

「学び方」以前に、
学びに向かう意欲が低い

- ◎授業の内容を理解できず、面白くないと感じている生徒にどう興味を持たせるか。
- ◎何のために勉強をするのか分からない生徒がいる。

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

課題解決のポイントと指導のヒント

—提案—

生徒の「学び方」、ひいては学習観を変えることによって
自律的な学習者を育てる

「自律的な学習者」の育成につながる 学び方指導のポイント

どのような思考過程を経て、問題を解いているのか、学習の中身を問う

適切な「学び方」を指導し、学習方法を変えることで、生徒に学ぶ楽しさや成果を実感させ、
学びに対する考え方(学習観)を変える

▶▶▶ **対談 P.6** 東京大大学院教育学研究科助教 **植阪友理**
岡山市立野谷小学校教頭(元岡山市立灘崎中学校主幹教諭) **床 勝信**

課題 **1** に対する指導のヒント

▶▶▶ **床先生の実践事例 P.12**

- 誤答を活用し、どこでどう間違えているのかを自分の言葉で説明させる
- 重要な考え方、理解のポイントを補足するプリントを配り、家庭学習と連動させる
- 授業の内容と連動して、評価(定期考査など)も変える

課題 **2** に対する指導のヒント

▶▶▶ **学校事例1 P.14** 岐阜市立東長良中学校

- 他学級・他学年の授業を生徒が参観し、多様な学習の仕方を学び合う
- 分からないことを教え合う場を設け、間違いから学べることがあると気付かせる
- 学習シラバスで各学年、教科ごとの「学び方」を示す

課題 **3** に対する指導のヒント

▶▶▶ **学校事例2 P.20** 安曇野市立穂高東中学校

- 学びに対する必要感(伝えたい、表現したい)を強く持てる課題を盛り込む
- 生徒が互いの理解を共有し、認め合う場をつくる

自律した学習者を育てるために 生徒の学習観を変える

認知心理学の分野では、結果よりも思考のプロセスを重視する学び方（学習方法）が効果的であるとされる。学び方指導を重視した授業を導入するためには、学校現場にはどのような意識改革が求められるのだろうか。認知心理学の専門家である東京大大学院の植阪友理助教と、授業改善に取り組んできた元岡山市立灘崎中学校主幹教諭の床勝信先生に聞いた。

学び方に関する課題

学び方を生徒に委ねたままでよいのか

学力向上への打開策として 心理学に基づく学び方指導を導入

——植阪先生と床先生は2006年から3年間、意味理解や思考のプロセスを重視する授業への転換に向けた共同研究に取り組んでいました。どのような経緯で研究を始められたのでしょうか。

床 私が岡山市立灘崎中学校に赴任した06年に、灘崎地区の小・中学校が岡山県から「学力・人間力育成推進事業」のモデル校に指定されました。この事業は、東京大の市川伸一

教授を顧問として、子どもの学力や地域の教育力に関する6つの仮説について効果検証を行う形で進められました。植阪先生は当時まだ大学院生でしたが、市川教授の理論に精通されていたこともあり、アドバイザーになっていたことになりました。

植阪 灘崎地区の先生方とは、指導案をばさばささまざまな議論をしました。私たちは、実践の土台となる認知心理学についてしっかりと伝えたいと考えていましたし、先生方にも「ここだけは譲れない」という一線があります。どのような発想で授業を組み立て、どの

ような課題を行うのかという、いわば「授業のデザイン」を理解していただくために、市川先生や私がモデル授業を行ったこともありました。

——認知心理学に基づいた学び方指導を授業で実践することについて、床先生はどのような印象を持たれましたか。

床 当時は文部科学省の「全国学力・学習状況調査」が始まる直前で、学力向上が大きな課題となっていました。しかし、私は、教師が説明して生徒に問題を解かせるという従来の授業の延長線上で、教え方を工夫したり問題を増やしたりするだけでは、大きな効果は期待できないのではないかと思っていました。授業をどのように変えれば、生徒の学力を上げることが出来るのか、具体的なイメージ

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

東京大大学院教育学研究科
学校教育高度化センター

植阪友理 助教

うえさか・ゆり◎東京大大学院総合教育科学科教育心理学コース博士課程修了。専門は、教育心理学、認知心理学、学習心理学。



岡山市立野谷小学校教頭
(元岡山市立灘崎中学校主幹教諭)

床勝信 先生

とこ・かつのぶ◎教職歴30年。専門教科は数学。岡山市立御南中学校に赴任後、岡山市立興除中学校、岡山市立香和中学校、岡山市立灘崎中学校に勤務。2010年度から岡山市立灘崎中学校主幹教諭となる。12年4月から小学校に異動し、現職。



ジを持っていない中で、学習における生徒の思考過程にアプローチしていくという市川先生の理論と出会い、とても興味を感じました。

不適切な学び方が生徒の理解を阻害する

——生徒の学び方には、どのような課題があるのでしょうか。

床 私が学び方の指導を重視した授業を始めた09年度の入学生を見て課題に感じたのは、ドリル学習を非常に好むことです。ドリル学習は、設問を読まなくても流れ作業的に取り組めるので、たくさん勉強したような満足感を得られやすい。だから、生徒は好むのだと思います。一方で、思考を伴う問題にはほとんど取り組みません。難しい問題に自分で教科書や参考書を読んで根気強く取り組もうとする生徒が、あまり見受けられませんでした。こうした学習姿勢が続くと、入学時は成績が良くても、2年生、3年生と学年が上がるにつれ、徐々に授業内容が理解できなくなっていくと思います。

植阪 私たちの研究グループでは、長年に行ったり、認知カウンセリングという心理学を生かした個別学習相談を行っています。そこで見えた課題も共通しています。つまり、一生懸命に勉強をして量はこなしているのに、質が伴っていないために学習内容が身に付いていない生徒が存在するということです。勉強

図1 生徒に見られる学び方の課題

- ドリル形式の演習には一生懸命に取り組むが、思考を伴う問題は避ける
- 答え合わせの時、解答を写すだけで終わってしまう
- 問題を解いても解きっぱなしで、答え合わせをしない
- ノートを見ると同じような間違いを繰り返している
- いい塾、いい先生、いい参考書であれば成績は伸びると信じている

*対談を基に編集部で作成

が出来る生徒は、自分は何が出来ていないのか、どこが間違っているのかを分析して次の学習に生かしますが、出来ない生徒は答え合わせをするだけで、間違えても原因を振り返ろうとしません。時間を掛けて覚えても、丸暗記をするだけで理解していないために結局身に付かず、定期考査が終わるとすぐに忘れてしまうのです。同じ授業を聞いていても、授業の受け方や日々の学び方の違いが学力の差に出るのです。

学び方の習得は生徒の責任なのか

——学び方について、先生方の指導面で課題に感じることはありませんか。

床 教師が生徒の家庭学習を評価する際、時間数や教材などの「枠組み」に目を向けるこ

とが多いと思います。生徒がどのような思考過程を経て問題を解いているのか、「学習の中身」を問うことはほとんどないでしょう。そして、その傾向は保護者にもあると思います。たくさん時間を費やして学習しても成績が伸びないと、学び方に問題があるにもかかわらず、「自分の子どもは勉強が出来ない」と考えてしまいます。学習の中身を問うことはせず、たくさん問題を解いているから、難しい問題集に取り組んでいるからと、それで安心してしまふのです。

植阪 多くの授業では、実施されているテストを見ると分かるように、正解したかどうかの評価の中心となります。一方、認知心理学では、正解を出すこと以上に、どの段階まで分かっていたら理解したことになるのかを問題にします。現在の学校の評価では、プロセスを重視するといわれながら、なかなかそこまで評価しきれていないのではないのでしょうか。

また、効果的な学び方を身に付けられない生徒がいても、それは生徒の能力や努力の違いと捉えられ、学校や教師の責任として意識されることもあまりないようです。近年では、学び方指導の一環として「学習の手引き」が配布されるようになりましたが、内容を分析すると、学習規律が中心であり、学習時間やノートの書き方、予習・復習の重要性を示すにとどまっているものが多いようです。中央教育審議会では、現在、学習の中身だけで

なく学習方法の指導についても検討されており、今後、学習指導要領に明示される可能性もあります。学び方の習得を生徒の自己責任

学力向上に効果的な学び方

学び方を変えるには学習観の転換が必要

認知心理学から見た

効果の得られやすい3つの学習方法

——認知心理学という効果的な学び方とはどのようなものなのでしょうか。

植阪 認知心理学では、学習方法は3つに大別されます(図2)。1つめは「深い認知的方略」です。認知的方略には浅い処理と深い処理があり、浅い処理は書いたり唱えたりする反復重視の学習方法で、深い処理は意味を理解しながら覚えたり、なぜそうなるのかを考えながら解く、意味理解を重視した学習方法です。有効と考えられているのは後者で、具体的には「漢字の部首の意味や成り立ちを考えながら覚える」「文章を読む時、自分の知識と結び付けながら読む」「英単語は接尾語と接頭語に分解して覚える」となります。

2つめは「メタ認知的方略」です。自分が分かっていること、分かっていることをはっきりさせたり、自分の弱点を分析したりと、自分の頭の中の働きを客観的に見ながら

にするのではなく、教科指導の一環としてどのように教え、身に付けたかどうかを問うことにも留意する必要性が高まると思います。

図2 認知心理学が提案する効果的な学び方

- ① 深い認知的方略
意味を理解しているか
- ② メタ認知的方略
自分の弱点を把握しているか
- ③ 外的リソース方略
他者や図など、外的資源を活用しているか

*植阪先生の提供資料を基に編集部で作成

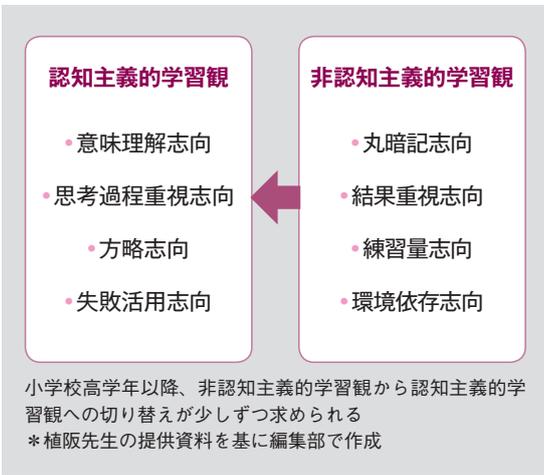
学習を進めます。「間違えた問題をもう一度自分で解く」「同じ間違いをしないよう、注意点をまとめる」などがこれにあたります。

3つめは「外的リソース方略」です。図や表、参考書、他者など、自分以外の外的な資源を使いながら問題を解決する方法で、「習ったことを図や表に書いてまとめる」「図や表を書いて考える」などがこれに当たります。——こうした学び方はどうすれば身に付くのでしょうか。

植阪 学び方は、教えればそのまま身に付くものではありません。個別学習相談をしてよく分かったのですが、多くの生徒が、効果的な学び方に共感して使い始めても、数か月も

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

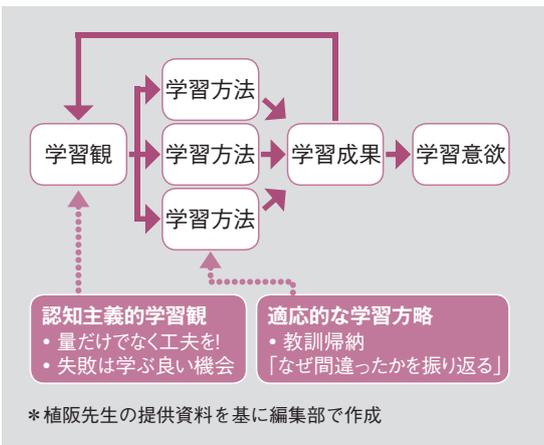
図3 学習に対する考え方(学習観)



経つと忘れてしまうのです。学び方の定着は、生徒がどのような学習を重要だと考えているかに大きく左右されます。私たちはこれを「学習観」と呼んでいます。学習観にはさまざまなものがあり、例えば、丸暗記さえすればよいという考え方、意味理解も重視する考え方、答えさえ合えばよいという考え方、思考プロセスも重視する考え方、練習量さえこなせばよいという考え方、学び方も工夫しようとする考え方、失敗を恥ずかしいと思う考え方、失敗を学習改善の機会と捉える考え方などです(図3)。

学び方はこれらの学習観に大きく規定されます。丸暗記をすればよいと思っっている生徒に意味理解の重要性を説いても、日々の学習では続かないので定着しません。つまり

図4 学び方(学習方略)と学習観が形づくられるプロセス



見直したり弱点を探したりするとよいとアドバイスしても、失敗を恥ずかしいと思っっている生徒や、失敗が自分を高める機会だと思っ

ていない生徒は、そういう学び方には手を付けません。根本にある学習観が変わらなければ、学び方も変わらないのです。

「自律した学習者」を育てる

生徒の学習観を変えるにはどうすればよいのでしょうか。

植阪 学習観は幼少時からの学習経験の積み重ねで築かれてきたものであり、個別指導だけで変えることは容易ではありません。最も効果的なのは、生徒が毎日受けている授業で意図的に指導していくことです。そして、何

よりも大切なのは、生徒自身が学び方を変えたことによる成果を実感することです。「出来た」「覚えた」という達成感や効力感を得ることによって学習観が変わり、学習の質も変わっていくと考えます(図4)。

床 定期考査前に生徒が立てた学習計画を見ると、得意教科にはそれほど時間をかけていません。生徒は自分で意識していなくても、効率良く学習していることがあるのです。たくさん勉強するわけではなく、自分なりに工夫して効率良く学習できているから短時間で済むことに、生徒は気付いていません。自分が無意識的にしていることを他教科に応用する、あるいは成績の良い友だちの学び方を真似る、といったことを意識させると良いのではないかと思います。

植阪 最終的には、そのような学習活動を通して「自律した学習者」を育てられると良いと思います。自律した学習者とは、つまり自

た時に自分で課題を発見し克服できる人です。社会に出れば、丁寧に教えてくれる先生も、詳しく説明がしてある教科書もありません。また、学校で身に付けた知識や技能は、時代の移り変わりと共にどんどん変わっていきます。効果的な学び方を身に付けておくことで、学校で習わなかった未知の知識・技能に出合った時にも、自分で学び、獲得できる。そうした学び続ける姿勢を育てることが、生きる力となると思います。

「理解する」を根本的に問い直す授業を

他人に説明できることが
理解した証し

— 学校教育で学び方を指導するには、具体的にどのような方法があるのでしょうか。

植阪 学習方法講座などを開いて学び方そのものを指導したり、授業を工夫して学び方や学習観を変えたりする方法があります。学び方はP.8図2で示したとおり教科共通で活用できるものですが、特に低学年では、教科ごとに具体的な学び方を示さないと、理解できない生徒が多いでしょう。例えば、数学の授業に、図や表を使って考えたり、筋道立てて問題を解いたりする時間を設けるのも1つの方法です。学年が上がったら、学び方を抽象化して、なぜ間違えたのかを分析する方法や、言葉で説明して理解を確認する方法などを指導するとよいでしょう。

授業にグループ学習やペアワークを取り入れ、他人に説明させて、自分の理解度を確認させる方法もあります。「学び合い」というと、友だちと一緒に学習することで意欲を高めることをねらいとする学校もあると思います。それも大切ですが、認知心理学では他人が理解できるように説明できて、はじめて自

分が理解できたと考えます。言葉だけではなく図や表を使って相手に伝えたり、相手の質問に答えたりすることで、自分自身の理解を深めることにも「学び合い」は活用できます。床先生の授業も、そうした学び合いを多用して、より深い理解を促しているところに特徴がありました。

床 私が授業で大切にしているのは、演習させることよりも、人に説明することで理解を深めたり、自分の理解度をチェックさせたりすることです。そのため、私が説明した後に同じ内容を生徒同士で説明し合い、その後、理解を深める課題として、誤答を見せて誤りを説明させたりしていました。

一般的な数学の授業では、教師が公式などを説明した後、生徒は例題に従って演習問題に取り組みます。しかし、これはドリル学習と同じで、生徒は例題の数字を機械的に入れ替えて解いている可能性もあります。それなのに、教師はその演習問題が出来れば、生徒は理解したと思ってしまふのです。意味が分からないまま公式を丸暗記しても、忘れれば解けなくなってしまう。覚えることは必要ですが、まずは公式を理解しなければ使える知識にはなりません。

このような授業の意図を、生徒に伝えるために「数学通信」を配布しました。考えたり説明したりすることがなぜ大切なのか、どのような学び方が理想なのかといったことを文章で説明し、生徒の学習観を変えようとした(図5)。

植阪 公式を覚えるだけではなく、なぜ公式が成立するのかを図を書いて説明させるといふ授業は、従来の発想とは大きく異なります。それだけに、これまで問題を解けさえすればよいと思っていた生徒は戸惑います。授業の意図をきちんと説明し、生徒の戸惑いや意識のギャップを埋めるために「数学通信」は有効だと思います。

これに加えて、床先生の実践は、授業だけではなく、定期考査の内容も変えたところが画期的だと思います。出来たか出来ないかを問う試験ではなく、考え方を重視する試験にすることで、生徒が今までの学び方を変えざるを得ないように誘導していました。

床 授業中にいくら「考えることが大事」「途中の経過が大切」と言っても、定期考査の問題が今までと同じでは、生徒は結局、元々の学び方を続けてしまいます。定期考査でも「なぜそうなるのか」を問う問題を出して、生徒の学び方や学習観を変えたいと考えました。そのため、定期考査では正答率だけでなく、「本当に理解しているのか」「学び方は適切か」といったことを重視しました。時には公式や

床先生の 実践事例

定期考査も授業に合わせて変え、 一貫して考える活動を重視

授業構成の工夫

教師の説明を 自分の言葉で説明させる

床先生は、2009年度に1年生を受け持ってから3年間、学び方指導を重視した授業を行った。入学したばかりの1年生であれば、変則的な授業も自然に受け入れられるだろうと考えたからだ。

授業の特徴は、授業の例題から定期考査まで一貫して「考えること」を中心に構成した点にある。授業では、まず先生が公式などを説明し、その後、生徒はペアやグループで、聞いた内容を自分の言葉で説明する。P.8 図2で示した3つの方略を全て取り入れた授業を行うことで、効果的な学習には考え、客観視し、振り返ることが重要であることを、生徒に繰り返し体験させる。

課題設定・評価の工夫

誤答を取り上げ 間違いはどこかを見付けさせる

2年生の多角形の内角の和の計算を例に見てみよう。通常の授業では「 $180 \times (n-2)$ 」

の公式を説明し、例題や演習問題に取り組み。床先生の授業では、公式の説明後、なぜ五角形の内角の和は 540 になるのかを、生徒に説明させることが課題となる(図1)。

「 n という抽象的な表現をなかなか理解できない生徒が多いのですが、五角形とすれば線を引くだけなので、視覚的にも理解しやすく、人にも分かりやすく伝えられます」(床先生)

次に、深める課題として、図の真ん中や線上に起点を取り、線を引いても、同じように説明できるかどうかを考えている。

「授業の後半ではドリル的な学習だけでなく、『発見』を重視して、生徒の興味・関心を引き出すスタイルも床先生の授業の特徴の1つです」(植阪助教)

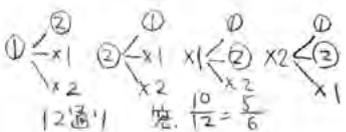
確率の授業では、単元テストで誤答が多かった設問を取り上げ、どこに間違いがあるのか言葉や文章で説明させた(図2)。自分の解答を客観的に分析し、間違いや弱点を見付ける力は、質の高い学習を行う上で欠かせない。授業の問題演習によって自分の間違いを言語化する練習を積み重ね、自己分析力を高めるのがねらいである。

図2 2年生「確率」での課題

従来の活動 当たり2本、はずれ2本が入っているくじから同時に2本引く時、当たりくじを引く確率を求めなさい

床先生の活動 下は、先日行った単元テストで、多くの生徒が間違えた例である。この解き方の間違いを説明しなさい

当たり2本、はずれ2本が入っている4本のくじから同時に2本取り出す。この時、当たりくじを引く(少なくとも1本は当たる)確率を求める全ての引き方を図に表してから求めなさい。



①-②と②-①は
同じだから
12通りではなく
6通り

図1 2年生「多角形の内角の和」での課題

従来の活動

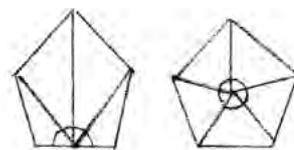
十角形の内角の和を求めなさい。正十角形の1つの内角は何度か

内角の和が 900° 、 1800° となるのは、それぞれ何角形か

床先生の活動

五角形の内角の和が、 540° となることを、図を使って説明しなさい

他の分け方での求め方を説明しなさい



*床先生提供の資料を基に編集部で作成

*床先生提供の資料を基に編集部で作成

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

授業でのこのような課題に合わせて、定期
 検査の問題も変えた。前述の多角形の内角の
 和では、一般的には内角の和を求める計算問
 題が出されることが多いが、床先生の定期考
 査では、なぜ六角形の内角の和が 720° になる
 のかを説明する問題とした(図3)。

定期検査では証明の穴埋めや全文書きが課
 されることが多いのだが、床先生は図を使っ
 て説明させることで、本当に理解しているの
 か、学び方は正しいのかを評価する問題とし
 た。

補助プリントの工夫

簡潔な解説を意識するようになり 授業が効率化される

新たな発想(学習観)による授業は、生徒
 にとってなじみがないものなので、戸惑う可
 能性もある。また、具体的にどのような方法
 で学習すべきかが分かりにくいかもしれない。
 そこで、床先生はさまざまな工夫によっ
 て、授業の意図を伝えたり、具体的に学び方
 を変えるイメージを伝えたりしている。

その1つが「数学通信」だ(P.11図5)。
 授業のねらいやポイントを記した補助プリン
 トで、重要と思われる単元や分野について解
 説する。発行は年間30〜50枚程。これを授業
 前の数分間で読ませたり、授業後に配布した
 りして、授業の意図を補足している。時には、
 他の生徒が書いた模範となる解答やノートを

紹介し、何をどのように書けばよいのかをイ
 メージさせる。

また、床先生は、例題を読むだけでもよい
 ので、予習を促し、生徒に授業に入る前に分
 かる点、分からない点を意識させるようにし
 た。そうすることで、授業中、生徒は予習で
 分からない部分に集中でき、教師は生徒の理
 解が弱い部分に焦点を当てて授業を進められ
 る。

「生徒が教師の解説をきちんと理解してい
 なければ、グループワークで他者に説明でき
 ません。そのため、教師も生徒が上手に説明
 できるようにと、分かりやすく簡潔な説明を
 意識するようになります。今まで冗長だった
 部分を簡素化し、より重点を置きたいところ
 に時間を掛けるなどの工夫をします。生徒同
 士に説明をさせることが、結果的に指導の効
 率化につながるのです」(床先生)

課題

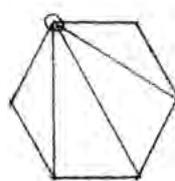
高校入試が迫ると 片付ける学習に戻る生徒も

授業改善の結果、学力向上や生徒の学習観
 の変化が見られたのは対談(P.11)で述べ
 たとおりだ。一方で、課題も見えてきた。3
 年生になり、高校入試が迫ってくると、課題
 を書き写して提出したり、意味も考えずに丸
 暗記したりする生徒が徐々に増えるという。
 理解するまでじっくり考えたり、友だち同士

図3 2年生「多角形の内角の和」の定期検査の問題

従来の問題 六角形の内角の和を求めなさい

床先生の問題 六角形の内角の和は、 720° になる。この求め
 方を下の図を使って説明しなさい



1つの頂点から対角線を
 引いて、三角形をつくる。
 六角形では4つの三角形が
 できた。三角形の内角の和は 180°
 なので $180^\circ \times 4 = 720^\circ$
 だから六角形の内角の和は 720°

*床先生提供の資料を基に編集部で作成

で教え合ったりするようになり、気持ちの余裕が
 なくなり、とりあえず片付けてしまおうとい
 う意識になってしまっているのだ。

「定期検査で求められたり、数学通信で呼
 び掛けられたりしている間は出来ていても、
 それがなくなると元に戻ってしまう生徒が見
 受けられました。教師の支援がなくなっても、
 自ら学んでいける力を身に付けさせることが
 ねらいでしたが、3年間で学び方を定着させ、
 学習観を変える難しさを改めて感じました。
 今後は、生徒が授業で示した学び方を自分の
 ものとしてどれだけ獲得できているのかを、
 確認する方法を考えていきたいと思えます」
 (床先生)

先輩や仲間の取り組みを通し 学び方を自ら見直し改善

岐阜県 岐阜市立東長良中学校

岐阜市立東長良中学校には、生徒が主体的に授業や学習をつくり上げていく学校文化がある。生徒同士が学年を超えて切磋琢磨し合い、より良い学習のあり方を模索する中で、学習への意欲を高め、自律的な学習態度が育まれている。

●学習意欲の醸成

主体的な学びは 学習環境の改善から

岐阜市立東長良中学校では、授業の開始・終了のチャイムが鳴らない。15年前、生活委員会から「チャイムが鳴ってから動くのでは受け身ではないか」「時計がなくても動けるようになりたい」という提案があり、生徒と教師がチャイムの意義を考え、どうすればチャイムが鳴らなくても時間通りに行動できるようにするのかを話し合い、チャイムをやめた。後藤喜朗教頭は次のように説明する。

「生徒が教育課程に参画するのは、本校の伝統です。運動会の演目の多くも、生徒が提案したものが受け継がれています。生徒の声に耳を傾け、生徒と教師が意見を交わすことは、本校では当たり前のことです。生徒に任せられる部分は任せ、共に学校を築いていくという校風が根付いています」

授業も、生徒と教師が共につくり上げていくという意識が定着している。学級目標の他に、学習目標をクラスごとに生徒が話し合っで決めている。生徒は積極的に授業に参画し、学び合いの場でも意見を述べ合い、互いを支え合う光景が日常的に見られる。

School Data

◎1988（昭和63）年開校。「共に自立をめざす生徒」を教育目標として、授業での学び合い、生徒と教師が共に学習活動の向上を図る「学習活動創造会」、学習シラバスの活用などを通して確かな学力の育成を目指す。



校長◎矢嶋英敏先生

生徒数◎ 621人 学級数◎ 19学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒502-0056 岐阜市長良真生町 3-27-4

TEL◎ 058-294-1782

URL◎ <http://cms.gifu-gifu.ed.jp/h-nagara-j/>

公開研究会◎ 2012年 11月 16日

同校は、25年前に長良中学校から分離独立して開校した。長良中時代から岐阜大教育学部の実習校に指定され、また、県内から派遣された教師の研修校として、教員養成の一端を担っている。しかし、あくまでも、学区内の生徒を受け入れる地域の公立校であり、生徒の家庭環境はさまざまで、学力は幅広い。そうした生徒が主体的に学びに参画する校風は、どのように培われてきたのか。

転機は、30年前、長良中学校での生活指導の改革にある。当時の校長が「環境が人をつくる」という信念の下に、校内美化を目標に生活指導に力を入れた。当初は生徒が積極的

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

に動くことはなく、教師が率先垂範で放課後に自ら教室を片付けていた。当時、担任として勤務していた矢嶋英敏校長はこう振り返る。

「全国的に生徒の荒れが問題となっていた時代で、本校も落ち着いた状況ではありませんでした。そうした中で、見た目を美しく整え、落ち着きのある環境をつくるのが、生徒が学びに向かう土台になると考え、生活指導に力を入れました。『見た目を美しく』は、目標として誰にも分かりやすく、結果が見えやすいという利点があります。指導は『型』から入りましたが、自分たちの活動によって学校が少しずつきれいになったことで、生徒は達成感を抱くようになりました。1つ出来たことが自信となり、更に良いものを求めて周囲に働き掛け、次の改善をする。この積み重ねによって生徒と教師の信頼関係が築かれ、本校の校風が生まれたのだと思います」

その校風が長良中学校から独立後も、同校に受け継がれてきた。今も生活指導は生徒が落ち着いて学習に向かう基盤となっている。

●生徒による学級の学習法改善 授業を他学級・他学年に公開し 学習の仕方を学び合う

生徒は具体的にどのように授業に参画しているのだろうか。同校では授業を「学習活動」と呼ぶ。教師が生徒に「業を授ける」だけでなく、生徒と教師が「共に築き上げていく」

という思いが込められている。

「本校の教育目標は『共に自立を目指す生徒』であり、教科の研究主題を始め、あらゆる教育活動の基盤になっています。生涯学習続けられる人を育てるのが我々の使命であり、生徒が目指す姿でもあります」（後藤教頭）

その姿勢が最もよく表れている取り組みが、「学習活動創造会」だ。1～3年生の全学級の代表が集まり、各学級の学習に関する取り組みを共有する場である。15年前、1年生が「先輩の学習を見てみたい」と、アンケートの中で授業見学を申し出たのが始まりだった。同校では学習活動に生徒の意見を取り入れるのは初めてだったが、共に何でもやってみようという意識や生徒との信頼関係を大切にしたという思いから、学校全体で取り組むことにした。教務主任の山口政有先生は次のように話す。

「シラバスには各教科の学習法や学び合いの進め方が書いてありますが、それだけでは生徒が自ら学習に向かう態度を養い、学習法を身に付けるのは難しいものです。先輩の取り組みを間近に見て、驚いて、感動し、こういう方法があったのか、こうすればもっとよくなるという気付きから、学習に向かう態度が育まれ、学習法が自分のものとなるのです」

学習活動創造会は次のように進める。

まず、年5回、それぞれ1学級が授業や学活を公開する全校研究会（全研）を開く。そ



岐阜市立東長良中学校校長 矢嶋英敏 やしま・ひでとし
「自ら率先垂範を示すことで、より質の高い教育を目指す学校風土を醸成していきたい」



岐阜市立東長良中学校教頭 後藤喜朗 ごとう・よしろう
「教師自身も自立した学習者として、共に学び合い高め合う職員集団をつかっていきたい」



岐阜市立東長良中学校 山口政有 やまぐち・まさとも
教務主任。国語科担当。「生徒の喜びを自分の喜びとして感じ、常に情熱を持って生徒と接していきたい」

れを、各学級の学習委員と当該教科の学習係（社会の授業なら社会科学係、学活なら進路委員）の2人が参観する。

全研の前後には、学級の代表が集まり学習活動創造会を開き、情報を共有する。

事前の「学習活動創造会Ⅰ」では、全研の参加者が一堂に会し、全研での目標や抱負を語り合う。公開授業を担当する学級の代表は、学級のこれまでの学習活動を発表し、公開授業の見どころを紹介する。各学級の代表は、その取り組みについて質問したり、自分の学級の課題を発表したりする。

2012年9月の学活の全研に向けた学習活動創造会Ⅰでは、見学する2年生から「学活は普通の授業に比べて挙手が少ない。学活を公開する2年1組が、どのような声掛けや

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

特に重視するのが、学び合いを円滑に行うための力だ。「自分の考えや思ったことを発表する時」「理由を述べる時」など、場面に応じて、さまざまな話し方を紹介し、コミュニケーション力の向上を図っている。

更に、発話の基になる思考法を紹介。「以前の学習と比較する」「他教科で学習したことを活かす」など具体例を示した。実際に学び合いで使うことで、生徒が学んだことを関連付けたり、根拠や理由が重要であることを意識させるねらいもある。

シラバスは、年度当初に配布して説明するだけになってしまっている学校もあるが、同校では普段の授業でも、「今日の学習はシラバスに書いてある力を付けるためのものだよ」「今のA君の発言は良かった。シラバスのここに違う表現が書いてあるから使えるようにしよう」など、折に触れて教師がシラバスと関連付けて価値付けし、生徒にシラバスの存在を意識させるようにしている。教科書やノートと一緒にシラバスを机の上に常備している生徒は多く、発言形式を参考にしながら行う言語活動などで効果を発揮しているという。

●学び合いでの工夫①

「分からない」と言える集団にして
間違いから学べるハンドを実感させる

同校では、1993年度から学び合いに重

点を置いて授業を行っているが、生徒のアンケート結果によって、学び合いを通して学習が「よく分かる」「分かる」と答えた生徒が8割に達する一方で、「分からない」と答えた生徒も15%おり、分からないことを友だちに伝えられた生徒は3割弱にとどまっていたことが分かった。出来る生徒が学習意欲を高め、学び方を身に付けている一方、自分の考えを持ってないまま、取り残されている生徒も一定数いることが明らかになった。

同校では、全ての生徒が学ぶ喜びを実感するためには、学び合いの土台となる基礎・基本の定着が不可欠であるという仮説を立て、11年度から「基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着」をテーマに研究を始めた。

第一に意識したのは、学習集団づくりの強化だ。「学び合いの活性化には、分からないことを『分からない』と言いつける集団であることが重要です。生徒が『失敗しても大丈夫』と思える雰囲気づくりも、学力向上に欠かせない要素だと考えます」(山口先生)

シラバスに学び合いでの方針を示すと共に(図2)、学

図2 シラバスでの「学び合い」の方針

全員が「分かる」学習活動をめざす!

“分かったつもり”から抜け出す
学習活動をめざす!

“分からない”なら“分からない”
と仲間にヒントを求める!

「分かった」の基準を明らかにする!

「10」のことを説明したら、学級全員が「10」を分かることが基準

◎自分の考えが通じなかったり、「何となく」と言われたら、自分の考えのどこかに課題があります。

解決策

自分の考えをできるだけ分かりやすく簡潔に話そうと整理してみましょう。メモや図にして整理してみる!

分かる

同じにする

伝えられる

分かりやすさには、人の心を動かす力がある!

*同校の資料を基に編集部で作成

習以外の場面でも仲間づくりを意識。学び合いでの席順も配慮し、「分からない」と意思表示をしやすい工夫をした。また、これまで学級ごとに挙手時のハンドサインを決めていたが(質問、考え中など)、11年度から「分からない」のサインも決め、授業が分からない時に活用するよう、生徒に呼び掛けた。これにより、授業で「分からない」と意思表示する生徒が増え、教える側の生徒にも「出来るだけ分かりやすく説明しよう」という意識が芽生え始めていると、山口先生は指摘する。

「いざ他人に教えようとするとうまく教えられず、実は理解していなかったことに気付く生徒もいます。学習において、間違いや失敗から学ぶことは重要であると、生徒は気付くのです。分らないと言えることは、その生徒が理解できるようになるだけでなく、教えた生徒が更に深い理解を得られる2つの利点があります」

●学び合いでの工夫②

生徒の思考プロセスに合わせた単元構成を工夫

学習指導計画の見直しにも着手した。この時間は基礎・基本の定着に重点を置いて指導し、次の時間では前時での知識を基に学び合いを行うというように、生徒の思考過程に沿った学習の並びになるよう、単元構成の見直しを図った。

国語を例に説明すると、以前は、取り上げた作品を貫く課題の確認や登場人物の整理などを行って作品全体の見通しを持たせたら、すぐに学び合いに入っていた。しかし、それは作品に関する基礎知識がない生徒には学び合いが難しく、基礎知識を持っている一部の生徒だけで学び合いが進んでしまっていた。そこで、11年度からの指導計画では、例えば最初の2時間で社会背景を学び、情景描写に着目する力を付け、作品理解のための基礎知識の定着を行った上で学び合いに入り、主人



写真2 1年生の国語の授業での学び合いの様子。文章が「推敲」された過程に着目し、文章の論理構成について考える課題に取り組んだ

公の心情の読み取りを行うようにした。

更に、学び合いの前に自分の考えを書く時間を設けるようにした。自分の考えをまとめることで、背景知識をきちんと理解できているか、どこが理解できていないのかを自ら明らかにするのである。教師は机間指導などで一人ひとりの理解度を確認し、理解が不足している生徒を個別に支援している(写真2)。

●自主学習の工夫

家庭学習計画をグループで立て計画を遂行する力を付ける

自主学習と家庭学習の充実も、取り組みの

柱の1つである。

定期考査の2週間前からは、帰りの会の後に数回の「チャレンジの時間」を設ける。自分の弱点や伸ばしたい教科を学び直す自習の時間だ。1回45分、前半30分は1人で取り組み、残りは友だち同士で教え合う。全校一斉でも2、3回実施し、教科担当が持ち回りで各学級を回り、生徒の質問に応じている。クラスによっては、教科係の生徒が作成した模擬テストに取り組み、分からない生徒に教えることもある。

家庭学習の充実のために活用しているのが「学習予定帳」だ(図3)。毎日の学習計画と達成状況を記入する生活記録で、朝の班会議において生徒が家庭学習の状況を報告し合い、仲間からアドバイスをもらう。宿題以外に、どのように家庭学習をすれば良いのかわからない生徒でも、友だちの学習法を知って取り入れることが出来る。

教師にとっては、生徒把握やコミュニケーションのツールのにもなる。その日の感想などを書かせることによって、生徒の日常の状態を把握し、学習内容や学習行動での気付きを見て、意思表示が苦手な生徒には、「仲間が発言した後の挙手を出来るようになるというです」などのアドバイスをする。

定期考査前には、学習予定帳を活用し、帰りの会で帰宅後に取り組む自習の予定を立て、班内で学習時間や内容を確認する。班に

「必要感」を大切にした授業で 学び方の土台をつくる

長野県 安曇野市立穂高東中学校

「自律した学習者を育てるには、学び方を指導する前に、まず生徒の心を動かす授業が大切」と語る安曇野市立穂高東中学校の松島千尋先生。先生が授業で何よりも重視するのは、生徒自身が英語を学びたいと思い、話したり書いたり動き出すこと。英語が苦手な生徒の心に火を付ける工夫を聞いた。

●背景

「英語なんて」と言う生徒に
必要感を持たせたい

安曇野市立穂高東中学校の3年生の英語の授業。松島千尋先生に伴われて、外国人ゲスト5人が教室に入ってくると、待ちかねていた生徒の間に軽いざわめき起きた。ゲストは、松島先生に招かれた信州大教育学部の教員と留学生で、1グループに1人ずつ入り、生徒とコミュニケーションを楽しんだ。

「Let's enjoy talking!」という松島先生の掛け声と共に、生徒とゲストの会話が始まる。

生徒は練習どおりに自己紹介をした後、各自で持ち寄った「日本の風物」をゲストに紹介していく。将棋盤や蚊取り線香、梅干し、団子、アニメのキャラクターなど。持ち寄ったものは実にさまざま（写真）。

「What's this?」

気軽に話し掛けてくるゲストに、生徒は身振り手振りを交えて、たどたどしい英語ながらも、用意したものを熱心に紹介する。

「This is wasabi.」

「Can you play shogi?」

分からない単語が出てきたら、グループの生徒がすかさず辞書で調べてサポート。仲間

School Data

◎1954（昭和29）年に穂高中学校として開校、2001年に穂高東中学校・穂高西中学校に分かれた。生徒全員が生徒会活動に参加し、あらゆる場面でルールを厳守する「ゼロ活動」を推進。規律ある学校生活の実現を目指す。



校長◎太田壽久先生

生徒数◎539人 学級数◎19学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒399-8303 長野県安曇野市穂高 5119-2

TEL◎0263-82-2230

URL◎http://www.city.azumino.ed.jp/east_jhs/

公開研究会◎未定

と協力しながら、生徒は初対面の外国人ゲストとの初めてのコミュニケーションを深めていった。

この授業を松島先生が企画した背景には、全ての生徒に英語を学ぶ「必要感」を持ってほしいという思いがある。

同校は、保養地や観光地として知られる安曇野市の東部に位置する公立中学校だ。近くには温泉や牧場、美術館がある一方、新興住宅地もひしめく。かつて荒れていた同校は、10年程前から生徒指導を徹底すると共に、小中連携の充実などを図ってきた。しかし、松島先生が赴任した5年前は、学校はまだ落ち

「自律的な学習者」を育てる学び方指導



写真 生徒と外国人ゲストの交流。松島先生が信州大教育学部附属松本中学校に勤務していた頃の人脈を生かして実現した

着いた状態ではなく、生徒を席に着かせることに時間が掛かり、授業を進めるのは容易ではなかったと振り返る。

「学習意欲が低く、英語なんか必要ないと思っっている生徒に、どんなに熱心に指導しても、受け入れてもらえないという状況でした」
 学校が落ち着いた今も、「英語なんて必要ない」と言う生徒もいる。また、英語の学習が大事だと分かっているにもかかわらず、やりがいを見いだせず、苦手意識を抱えたまま卒業する生徒も多い。それらの生徒たちが、英語に向き合うためには何が必要なのか。松島先生は、生徒が自ら「英語を学びたい」と思うような教材や場面設定を工夫することだと考えた。

「高校受験という目前の目標ではなく、その先の将来を見据えた指導が大切です。教師の熱意や愛情、信念が生徒に伝われば、それが生徒のやる気となり頑張れるようになると思うのです」（松島先生）

●学習に向かわせる工夫①

「伝えたい」という強い気持ちが生徒の「学び方」も変える

松島先生が授業づくりで最も大切にしているのは、生徒に英語を話したいと思う状況をつくることだ。

「どの教科にもいえることですが、『学びたい』という心が育っていない生徒に、どんなに学び方を指導しても身に付きません。生徒が話したいこと、書きたいと思えるようなことは何か。生徒が何を望んでいるのかを考えて、それにふさわしい教材や場面に探し続けるよう心掛けています」（松島先生）

その工夫の1つが、冒頭に紹介した外国人とのコミュニケーションだった。

「教科書では、必ず日本の風物を扱います。しかし、友だち同士でペアワークをしても、たいがいの『日本の風物』は知っているので面白くありませんし、伝えようという気持ちもあまり持てません。しかし、自分のお気に入りのものについて何も知らない外国人に紹介することになれば、活動に対する必要感が生まれ、意欲が高まると思います。授業では、



安曇野市立穂高東中学校
松島千尋 まつしま・ちひろ
 英語科。「生徒にはさまざまな可能性がある。英語を学びながら感性を磨き、社会に大きく羽ばたく人を育てたい」

生徒が伝えたいことを大切にするために、まず紹介する内容を日本語で書かせます。そして、その内容を出来る限りシンプルな英文に直していくのです。外国人に自分の伝えたいことが伝わった、相手が言っていることが分かったという体験は、生徒にとって大きな自信になるでしょう」

事実、今回の活動では、松島先生も予想しなかった生徒のやる気が見られた。

ある生徒は、1・2年生の時には英語の授業にあまり熱心ではなかったが、自分が熱中している空手のことを伝えたいと考え、外国人にも分かりやすいように何度も英文を修正し、ペアワークで紹介の仕方を何度も練習した。ほぼ英文は出来上がっていたが、本番前に黒帯になり、そのことも伝えたいという思いから、英文を全て書き直した。

また、テストでいつも平均点以下だった生徒が、活動中に「○○を伝えたい時は英語で何て言えばいいの？」と、松島先生や仲間によく質問する姿も見られた。

「生徒が自分の思いを何とか英語にして伝えようとすると感動しました。また、何度も辞書を引いたり、教科書の例文を見たりし

ながら英文を修正するうちに、語彙力や英文の力が伸びていることに驚きました。教師にやらされていたり、自分が関心のないテーマだったとしたら、ここまで粘り強く英文を修正しなかったでしょう。『何としても伝えたい』という気持ちで、英語に向き合う気持ちだけでなく、その学び方も変えることを実感しました」と、松島先生は手応えを述べる。

題材には道徳的なテーマを選び、生徒が書きたい、話したいという気持ちにさせる。ある授業では、写真家のケビン・カーター氏がスーダン内戦の惨状を伝えようと撮影した「ハゲワシと少女」を題材とした。カーター氏は少女を助けるためにまずハゲワシを追い払うべきだったのか、ハゲワシを追い払わなかったからこそ、あのような写真が撮影でき、スーダンの現実を世界に知らせることが出来た功績を称賛すべきなのかを各自が考え、その思いを英語で表現させた。「面倒くさい」と言っ

て嫌がる生徒は1人もいなかったという。「道徳的なテーマは自分の考えを持ちやすいので、書きたいという思いを喚起できます。道徳の授業ではないので、どのように感じたのかを深く掘り下げるのではなく、まずは内面で感じた思いや考えが表現できているかどうかを見ている」（松島先生）

題材選びで先生がもう1つ意識するのは、教科書にこだわらず、生徒のためになると思った題材を積極的に活用することだ。「ハ

図 「イングリッシュ・タイムズ」



「イングリッシュ・タイムズ」は生徒の感想を共有し、自己肯定感を高めることがねらい。自分の感想がここに載ることが学びの1つのモチベーションになっている生徒もいる。また、生徒が活用した表現を紹介し、興味のある表現はそれぞれの「マイ・ツールボックス」に入れておくように指示している
*同校の資料をそのまま掲載

ゲワシと少女」は指定外の教材に掲載されていた写真だが、同校の指定教科書に載っていた「We Are The World」の歌詞からアフリカの貧困の話題を掘り起こし、「ハゲワシと少女」につなげた。「教師が常にアンテナを広げて、生徒の心を揺さぶるような教材を探すことが大切です」と松島先生は強調する。今後も、環境問題や人間関係などに思いを向けさせていきたいと話す。

●学習に向かわせる工夫②
生徒が安心できるクラスづくりが
他の生徒から学ぶ姿勢につながる

松島先生が授業づくりで意識する2つめのポイントが、クラスづくりだ。良い題材を与えても、間違いを受け入れる雰囲気がないと、

生徒は委縮し、英語を使おうとはしなくなる。英語を安心して使える環境とするために、授業でどのようなことが印象に残ったのか、難しくなかったのか、互いの理解を共有しながら、生徒同士の人間関係を構築していくような取り組みが重要だと考えた。

松島先生がクラスづくりに活用するのが、1単元に4〜5回発行する教科通信「イングリッシュ・タイムズ」だ。授業のポイントと、授業に対する生徒の感想を紹介する(図)。

「開かれた人間関係でなければ、皆の前で英語を使う気にはなりません。友だちの考えを知り、互いの気持ちに分かるようになれば、一人ひとりが安心していられるクラスになります。英語の学力向上とクラスの人間関係づくりは、授業の中で密接にかかわっていると

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

考えます」(松島先生)

「イングリッシュ・タイムズ」は、生徒の努力や成長を認める場でもある。例えば、生徒が書いた英文を載せて「A君は今日こんな英文を書いていました」と紹介したり、「今日の活動で、Bさんがこんなことを言いました」と生徒の授業の感想と松島先生のコメントを載せたりしている。

「生徒が授業中に感じたこと、分からなかったことをクラス全体で共有することで、理解が更に深まると考えています。学年が上がりが内容が難しくなると『自分だけが理解していないのかも』と不安になる生徒もいます。生徒が言えなかった質問や間違いを『良い題材』として教科通信に活用すれば、『自分も授業に参加している。認められている』という気持ちになるでしょう。そうした自己肯定感や『他の生徒の学びからも学ぼう』という意欲や姿勢につながっていきます。生徒の学び方を変えるためには、まず、その生徒の学習に向かう気持ちや意欲から変えていくことが大切だと思うのです」(松島先生)

●学習に向かわせる工夫③

体験と教科書を結び付け 生きた知識にしていこう

松島先生は、学び方の土台となる「必要感」や「自己肯定感」を高める授業づくりと同時に、基礎学力が身に付いていない生徒に対す

る具体的な学習法も指導している。

「マイ・ツールボックス」は、教科書や参考書などに出てきたお気に入りの英語表現をストックする、自分だけのツールボックスだ。必須の表現は松島先生が出すので、基礎は確実に押さえられる。このツールボックスにストックした表現を、あるトピックについて5分間で英作文を書く「5分間英作文」に活用する。マイ・ツールボックスを意識的に活用させることで、情報のアウトプットとインプットを何度も往復し、理解を定着させていく。マイ・ツールボックスは、基礎学力を高めていく上で重要な役割を果たしている。

活動の振り返りも重視する。冒頭に紹介した外国人ゲストとのコミュニケーションでは、次の授業で振り返りを行った。活動中に困ったことは何か、どういう言葉が通じたのかをワークシートに書き、それらを文法事項に照らし合わせながら、生徒全員で確認していく。例えば、「これを食べたことがあるか」という文が出てこなかったという振り返りに対し、「現在完了形を勉強したよね」というように、体験を教科書に結び付けて、生きた知識として定着させていく学習の仕方だ。

●成果と課題

人と人とのつながりが 自律的な学習者を育てる

一連の指導により、生徒の学力は確実に上

がっている。

「グローバル社会で大切なのは人と人とのつながりです。つながりの中で何が自分に不足しているのかに気付き、自分にとって必要な学び方も模索するようになるのだと思います。だからこそ、Heart to Heartで人とつながれる力を、授業を通じて身に付けてほしいと思っています。生徒の心を動かすような授業、生徒が自分の成長を実感できる授業をこれからも目指していきます」

松島先生が
考える

自律した学習者の育て方

自律した学習者を育てるためには、何よりも生徒の心を動かすような授業が必要です。大人は時として、『勉強はしないといけないものだから嫌でもやらなくてはならない』というように生徒を納得させようとします。また、高校受験が近付けば、嫌でも勉強せざるを得なくなるでしょう。しかし、無理やりやらされる学習では、生徒は心の底から学ぼうとは思いません。

英語が楽しい、必要だと感じてスイッチが入った時、生徒は自ら意欲的に学び出し、受験勉強にも前向きに取り組めるようになるのです。

「自律的な学習者」を育む指導に向けて

最後に、東京大大学院・植阪友理助教と岡山市立野谷小学校・床勝信教頭の対談、床先生の実践、および2校の実践事例を通じた編集部からの提案と、「自律的な学習者」を育てていくための学び方指導のポイントをまとめた。

今回の特集を通して編集部が伝えたいこと

学び方指導で学習観を変え 学力向上につなげる

本特集の企画を立てる過程で多くの先生に意見をうかがった。そこで見えてきたのは、「一生懸命に課題に取り組むが、与えられた問題をこなすことしか考えていない」「家庭学習の重要性を伝えても、何をどのように勉強したら良いか分かっていない」「学び方以前に学習意欲がない」といった生徒の姿だった。学習意欲が低い生徒だけでなく、頑張っ

て学習しているのに学力が上がらないといった悩みを抱える生徒に対して、今回は生徒の「学び方」に着目し、その解決の方向性を考える特集を組んだ。

学び方を変えるために、生徒の理解の自身を問うと共に、授業のデザインを変え、評価の方法を変える重要性が指摘された。教師に限らず、生徒や保護者を取り巻く教育関係者が生徒の学力向上を図る際、学習時間や教材の質に頼った課題解決を図る傾向にあるが、まず生徒の「学び方」を変えることによって、学習に対する考え方（学習観）を変え、学力向上につなげるという指導は、非常に示唆的であった。

経済的に明るい兆しが見えにくい社会情勢の中で、短時間かつ少ないコストと負荷で、いかに多くの知識やスキルを獲得できるかという効率性が、ますます重視されるようになっていく。そのような「効率性」を求める時代だからこそ、生徒が何をどのように理解したのかを丁寧に見取り、その学習プロセスや1つの間違いから学び取る力を高めていく指導が、より一層重要になるのではないかと。もちろん、生徒の学び方を変え、更に学習観をも変えることは容易ではなく、すぐに成果が得られるものでもない。しかし、今の中学生が抱える学習課題の本質を捉え、認知心理の知見を生かし、粘り強く指導改善に取り組んでいる植阪助教と床教頭の実践は素晴らしい、その蓄積から我々が学べることは多いのではないかと。

同様に、岐阜市立東長良中学校や安曇野市立穂高東中学校の指導にも、生徒の「学び方」を変えていく上で重要な指導の工夫が見られた。東長良中学校では、単に学習シラバスを配布するだけでなく、学習シラバスを活用させながら、多様な学び方を相対化し、自分や自分たちの学級に合った学び方を学び合う場を用意する大切さが示された。学び方を変える第一歩として、自分自身を見つめ直す、自分の間違いや失敗に目を向けることが不可欠

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

であるが、それは安心して学び合えるという集団があつて初めて成立する。その意味で、教師主導ではなく、生徒が主体的に学年を超えて「学び方」を学び合う「学習活動創造会」は、生徒の自治性を育むという側面でも興味深い取り組みである。

また、穂高東中学校の松島千尋先生の実践では、生徒が主体的に学習するために、生徒個々の「必要感」を課題に盛り込み、生徒が能動的に動けるクラスづくりを行う重要性が指摘された。生徒が「書きたい」「話したい」

とこだわられる課題を取り入れることで、学習意欲だけでなく、その学び方（粘り強く最後まで英文を修正する）までもが変わるといった生徒の変容が、何よりもその成果を示すものだろう。

生徒は何かを学ぶ時に、同時にその学び方も学んでいる。生徒がどのような考え方を持って学習に取り組んでいるのか。学びに向かう意欲を支える「学習に対する考え方」にも注意を払いながら「学び方」を指導することが求められているのではないだろうか。

対談・2校の取り組みから学ぶ 学び方指導のポイント

「学び方」を変えるために
指導だけでなく評価も変える

東京大大学院の植阪友理助教と岡山市立野谷小学校の床勝信教頭との対談（P.6）では、生徒が「公式を覚えるだけでなく、なぜ公式が成立するのか」までを理解するために、授業だけでなく、補足のプリント教材や定期考査まで変える重要性が語られた。

しかし、従来の指導スタイルを大きく変えることについて、不安を覚える先生も多いのではない。床先生は結果的に演習問題を減らすという指導変革を行ったが、演習問題を

解かせる指導に否定的なわけではない。あくまで目の前の生徒の「つまずき」を解決するために、どこから指導していくかを重視した結果であり、それが今回は「学び方から変える指導」ということであった。一人ひとりの生徒が抱える課題はさまざまではあるが、生徒の学習課題を解決するために「生徒の理解」にまで踏み込んだ指導は、全国の先生にも参考にしていただけるのではない。

学習シラバスを活用しながら
多様な学び方を学ばせ合う

岐阜市立東長良中学校（P.14）は、学年・

教科ごとに学習シラバスを作成し、学び方や学び合いの進め方を指導していた。学習シラバスの配布だけでは、生徒が自ら学習に向かう態度や学び方を身に付けることは難しいという課題意識から、生徒が他学年・他学級の授業を参観して学び方を学び、自分たちの学級の学び方を改善する活動をしていた。

「学習の手引きを作成したが、あまり生徒に活用されていない」という先生の声を耳にするが、東長良中学校のように、学習シラバスを土台にしつつ、体験を伴った学び方の改善、創造につなげるという活動は、より実践的な学び方指導の一例として参考になるだろう。

生徒個々の必要感を課題に盛り込み
意欲だけでなく学び方も変える

安曇野市立穂高東中学校の松島千尋先生（P.20）が担当する英語の授業では、学習意欲をあまり持てない生徒たちが継続的に学びに向かうための指導の工夫として「生徒個々の必要感」を重視した授業を行っていた。

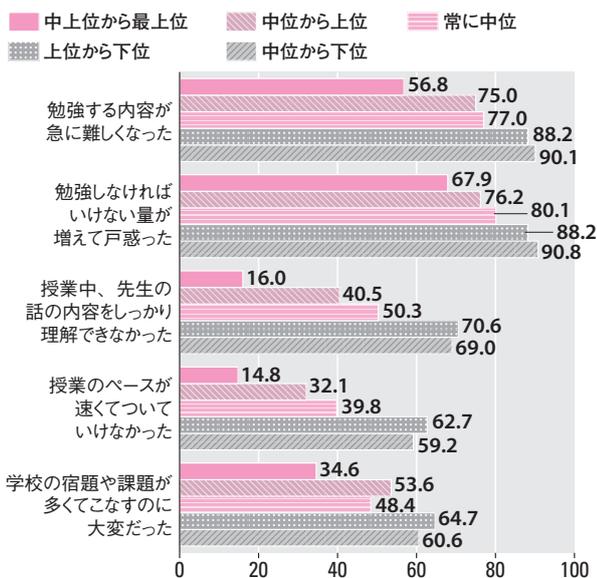
そして、学びに向かう意欲を高め、学び方まで変える実践のポイントとして、何より生徒が互いの理解を共有し合える場をつくり、安心して学び合える人間関係をつくることの重要性を指摘した。特に、「学び方以前の学習意欲から」という課題を抱えている先生方に共感いただける内容なのではないか。

「中学1年生の学習と生活に関する調査」結果から 学力が伸びた生徒、伸び悩んだ生徒の違いとは

中学入学後、小学校との環境の違いを乗り越えて伸びていく生徒と環境の違いを感じて伸び悩む生徒にはどのような特徴が見られるのか。調査の中でも特に勉強面に焦点を当て、中学入学後に直面した困難、またその克服方法から、両者の特徴を分析する。

1 伸び悩んだ生徒は、授業内容をよく理解できず 授業の速さに対応できていない

□ 直面した困難(勉強内容・勉強量・授業レベル)



注1) 数値は「とても感じた」+「やや感じた」の%
出典 / Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

勉強内容や授業に関する「中学校1年生で直面した困難」について見ると、成績が伸びた生徒と伸び悩んだ生徒では、特に、内容理解や授業のペースの感じ方で差があることが明らかになった。

集団指導の中でいかに個にも応じた指導を行っていくか。非常に難しいが、改めてその必要性が見て取れる。

「中学1年生の学習と生活に関する調査」概要

今回は、特に生徒の学力変化に着目しデータを加工・分析している。成績に関して尋ねた項目(「5」が上の方、「4」が真ん中より上の方、「3」が真ん中くらい、「2」が真ん中より下の方、「1」が下の方)を活用し、生徒を分類。中学1年生1学期の成績から1年生終了時まで、中位から上位に変動した生徒を「伸びた生徒」、上位・中位から下位に落ち込んだ生徒を「伸び悩んだ生徒」として、その特徴を追いかけた。「真ん中より下の方・下の方」から「上の方・真ん中より上の方」に移動した生徒もいたが、サンプル数が少ないため今回の分析からは除外している。

成績の変動ごとにその構成比率を見てみると、成績が伸びた生徒、伸び悩んだ生徒はそれぞれ約2割、あまり変動しなかった生徒は約6割であった。

中学1年生1学期から1年生終了時までの成績変動		
伸びた生徒	中上位(真ん中より上の方)→最上位(上の方)	81人
	中位(真ん中くらい)→上位(上の方・真ん中より上の方)	84人
あまり変動しなかった生徒	中位(真ん中くらい)→中位(真ん中くらい)	517人
伸び悩んだ生徒	上位(上の方・真ん中より上の方)→下位(真ん中より下の方・下の方)	51人
	中位(真ん中くらい)→下位(真ん中より下の方・下の方)	142人

■ 調査主体 / Benesse教育研究開発センター

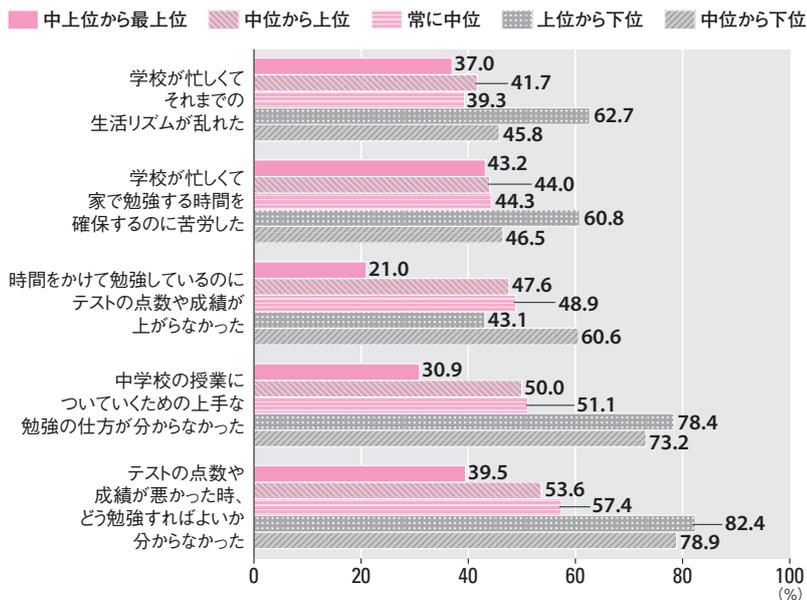
■ 調査期間 / 2012年7月

■ 調査対象・内容 / 全国約3000人の中学2年生とその保護者を対象に、中学校入学後のギャップや学習習慣、日々の過ごし方などについて尋ねた。有効回答数は875人

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

2 伸び悩んだ層の中には生活リズムや勉強の仕方に問題を感じていた生徒が多い

□ 直面した困難(生活リズム・勉強の仕方)



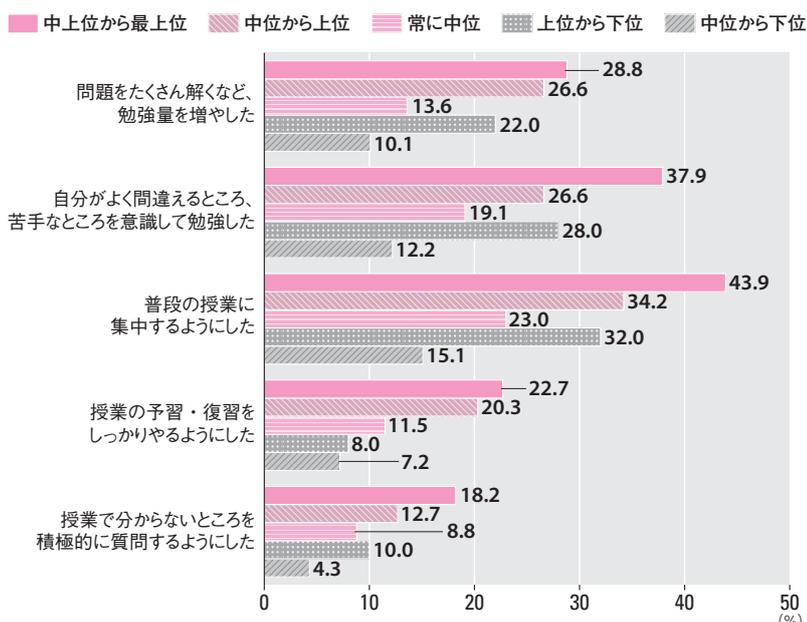
注1) 数値は「とても感じた」+「やや感じた」の%
 出典／ Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

まず、生活リズムに関する困難について見ると、特に成績が落ち込んだ上位→下位の生徒において、生活リズムの乱れ、家庭での勉強時間の確保に苦しんだ様子がうかがえる。入学直後は、部活動だけでなく、中学校の学習にも慣れていく必要があるなど多くの環境適応を求められる。リズムをつかむことに苦しんでいる生徒については、適宜、教師や保護者がサポートしていきたい。

勉強の仕方については、「時間をかけて勉強しているのにテストの点数や成績が上がらなかった」や「中学校の授業についていくための上手な勉強の仕方が分からなかった」「テストの点数や成績が悪かった時、どう勉強すればよいか分からなかった」の項目で、伸びた生徒と伸び悩んだ生徒の差が見られた。

3 伸び悩んだ生徒にも努力は見られるが、改善につながっていない

□ 苦手克服のために行ったこと(基本的な取り組み)



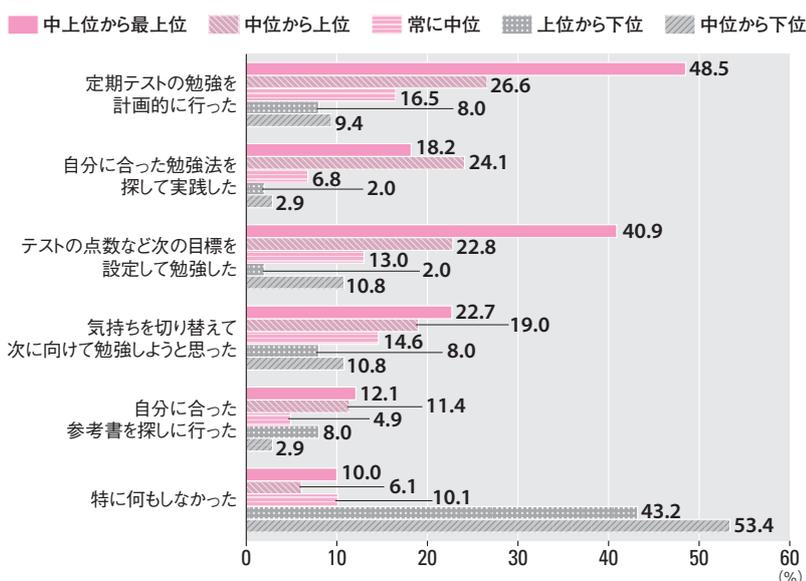
注1) 数値は「とてもそう」+「まあそう」の%
 注2) 「最も苦手になった科目」に対する克服方法を回答。「苦手が無い」と回答した生徒は集計から除外。
 出典／ Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

「苦手克服のために行ったこと」を尋ねたところ、伸びた生徒ほど勉強量を増やし、苦手を意識した勉強に取り組み、普段の授業に集中するなど、基本的な学習習慣が定着している傾向が見られる。

一方、上位から下位に落ち込んだ生徒を抽出してみると、勉強量や苦手を意識した勉強、授業への集中といった項目について、中位から上位に成績が伸びた層と変わらない傾向が見られた。上位から下位へと大きく下降した生徒は、努力の方向性や仕方が分からず、課題改善うまく結び付けられていないのかもしれない。

4 伸びた生徒の4~5割は計画的な勉強や目標設定を行う一方、伸び悩んだ生徒の4~5割は何もしていない

□ 苦手克服のために行ったこと(勉強の仕方)



注1) 数値は「とてもそう」+「まあそう」の%

注2) 「最も苦手になった科目」に対する克服方法を回答。「苦手がない」と回答した生徒は集計から除外。

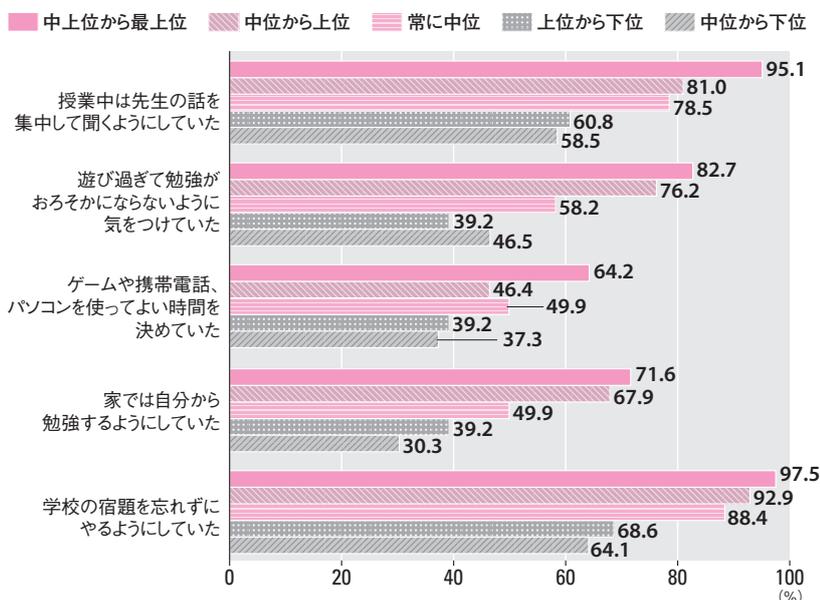
出典／Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

勉強の仕方に関して苦手克服のために行ったことを見ると、中上位から上位へ成績が伸びた生徒は「定期テストの勉強を計画的に行った」「テストの点数など次の目標を設定して勉強した」といった工夫をしている様子が見える。また、伸びた生徒のうち2割程度は、自分に合った勉強法を探して実践するという努力もしているようだ。

一方、成績が伸び悩んだ生徒は、勉強の仕方について特に工夫が見られず、「特に何もしなかった」が4~5割と著しく高くなっている。

5 伸びた生徒は、ゲームや携帯電話などの遊びと、勉強との切り替えがうまく出来ている

□ 生徒の勉強に対する意識・遊びとの切り替え



注1) 数値は「できていた」+「まあできていた」の%

出典／Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)

勉強に対する意識や時間の使い方について見たところ、成績が伸びた生徒は伸び悩んだ生徒に比べ、「授業中は先生の話を集中して聞くようにしていた」「遊び過ぎて勉強がおろそかにならないように気をつけていた」「ゲームや携帯電話、パソコンを使ってよい時間を決めていた」の比率が高く、遊びと勉強との切り替えをうまく行っている様子が見える。

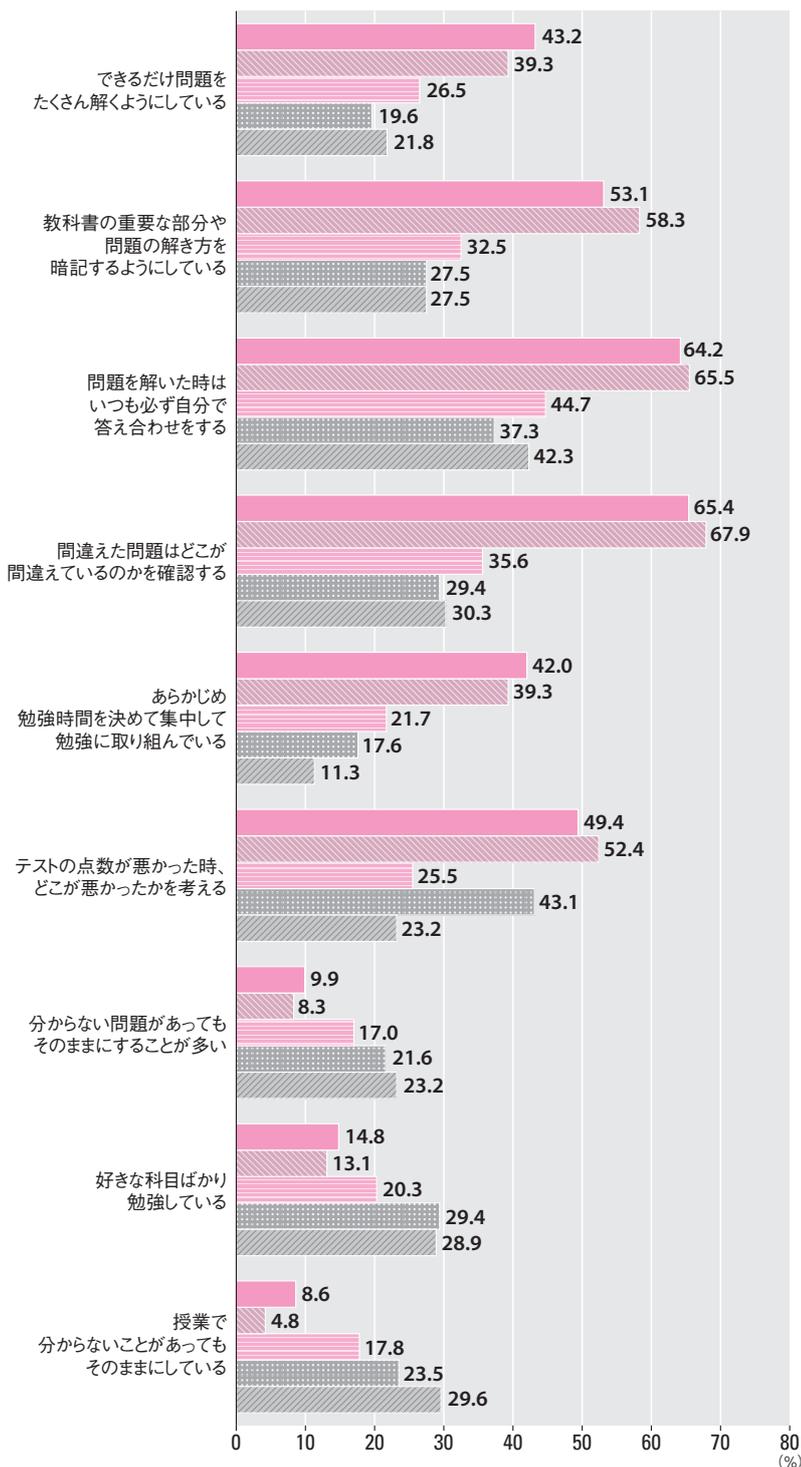
また、「家では自分から勉強するようにしていた」「学校の宿題を忘れずにやるようにしていた」などの質問項目でも違いが見られ、伸びた生徒は回答率が高かった。

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

6 自己採点や間違いの確認など 基本的な見直し習慣が身に付いている生徒は、学力が伸びている

現在の勉強方法

■ 中上位から最上位 ■ 中位から上位 ■ 常に中位 ■ 上位から下位 ■ 中位から下位



現在の勉強方法に関する回答傾向を、成績が伸びた生徒と伸び悩んだ生徒で比較したところ、まず「できるだけ問題をたくさん解くようにしている」「教科書の重要な部分や問題の解き方を暗記するようにしている」といった基本的な勉強量で差が見られる。

また、勉強量だけでなく「問題を解いた時はいつも必ず自分で答え合わせをする」「間違えた問題はどこが間違えているのかを確認する」といった勉強の質に関する項目でも、伸びた生徒の回答比率が高くなっている。更に、「あらかじめ勉強時間を決めて集中して勉強に取り組んでいる」といった集中の工夫も、成績が伸びた生徒の勉強方法の特徴である。

一方、伸び悩んだ生徒は「分からない問題があってもそのままにすることが多い」「授業で分からないことがあってもそのままにしている」「好きな科目ばかり勉強している」といった項目で回答比率が高い。間違った問題、分からない問題からいかに学ぶかという、学習に対する姿勢や習慣が、1年生における成績の伸びの差になっているのだろう。

注1) 数値は「とてもそう」+「まあそう」の%
 出典／ Benesse教育研究開発センター「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)



ミドルリーダーの挑戦
—前へ! 前へ!!

教科を超えた授業研究にチャレンジし 学び合える教師集団を築きたい

新潟県糸魚川市立糸魚川東中学校 柳澤 淳 41歳



Middle Leader

やなぎさわ・あつし◎教職歴18年目。新潟市立山の下中学校、上越市立春日中学校などに勤務後、同校に赴任して2年目。37歳から2年間は上越教育大大学院に内地留学。担当教科は社会科。学年主任、研究主任。

これまで私が歩いてきた道のり

授業中、他クラスの 授業ノートを 写す生徒にがく然

新任の頃のことは今でもよく覚えて
います。授業中、生徒は下を向きつ
ばなしで、問い掛けても発言する生
徒は少なく、私が一方的に話すだけ。
同期と夜遅くまで指導案を練って授
業に臨んでいましたが、思うように
進められず、苦しい毎日でした。指
導案が中途半端な時は、授業に行く
のが怖くて仕方ありませんでした。

ある日の机間指導中、生徒が板書
と全く違う内容を熱心に書いている
のに気付きました。よく見てみると、

それは私の新任研修担当の堀秀泉先
生の授業内容で、友だちからノート
を借りて写していたのです。自分の
授業は聞く価値がないのか——情け
ない気持ちでいっぱいでした。

私は先生にお願いして授業を見学
させてもらいました。それは驚きと
発見のある授業で、生徒は楽しそう
な顔で先生の話に聞き入り、キャッ
チボールをするかのように発問と発
言が行き交っていました。そうやっ
て授業が終わる頃には、生徒は学習
内容を納得し、理解していたのです。

一方、私は教科書の内容をどう「伝
える」のかばかりを考え、「どうす
れば伝わる」のかを考えていません

でした。生徒の心に落とし込むこと
が出来ていなかったのです。

理想は生徒と共に 授業を見て真似て ノートを写して流れを学んだ

堀先生のような授業をしたい。私
は何度も授業を見学し、発問のタイ
ミング、発言に対する受け答え、板
書の工夫など、気付いたことを何で
もメモしました。更に、生徒から
ノートを借り、授業を思い返しなが
ら書き写しました。こうして授業を
どう進めればいいのかを学んだので
す。先生によく相談もしました。指
導法に関する本もたくさん読みまし
たが、それよりも先生の授業を見て、
話を聞いた方が何十倍も勉強になり
ました。

先生の真似をしても、すぐに先生
のような授業は出来ませんでした。
でも、理想とする授業が目の前にあ
り、自分なりにどうすればいいのか
を思い描けたことで、苦しくても諦
めることはありませんでした。

新任の研究授業では、私は「生類
憐みの令」を取り上げました。堀先
生に相談をし、導入で同時代の忠臣
蔵の討ち入り場面のビデオを見せて

授業を始めました。「季節は?」「冬」「時間帯は?」「夜」「どうして誰にも気付かれずに吉良邸まで行けたと思う?」——私の発問に生徒から答えが次々に挙がり、その答えに対して別の生徒から疑問が出てきて、話し合いは大いに盛り上がりました。

今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

自分の発問で生徒の好奇心を引き出し、考え、発言し、それが周りの生徒の思考につながっていく。その時に感じた生徒とやりとりをしながら進める授業の楽しさが、今も私自身の授業研究のモチベーションになっています。

私自身がやりがいを感じられるよう

自分に来れることをする

2012年度からは、1学年主任と研究主任を務めています。担当の学級や教科以外に、学校全体、学年全体のことを考えるのは初めての経験で、なかなか見通しを持って試行錯誤の連続です。ただ、そうした中でも、今までの経験を踏まえながら「もっとこうしてはどうか」と活動を先生方に提案していくことが大切だと思っています。

1学年主任としては、4月の学活で家庭学習の仕方を指導する際に保護者にも参加してもらい、生徒と一緒に学ぶ意味を考え、実際に家庭学

習をする活動を行いました。

研究主任としては、授業研究を教科横断のグループで行うことを提案。本校の教師は約20人で、担当が1〜2人という教科もあります。小規模校で授業を見合う時間を確保するのは、大規模校以上に調整が大変なのですが、まずはやってみなければ何も変わらないと思い、学年や教科に関係なく5人ずつに分け、1人の授業を他の4人が見て、事後研究会を行うようにしました。私も、他教科の授業について事後研究で話し合うのは初めてで、教材の選び方や生徒との受け答えなど、学ぶことがたくさんありました。一方で、教科が異なっても、指導において大切なことは共通するものだとも実感しま

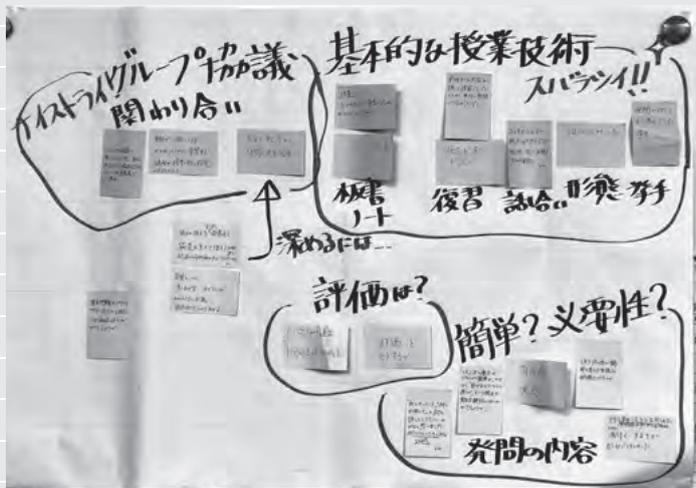
した。他の先生方も同じことを感じただけでしょう。事後研究会では率直な意見が飛び交い、予想以上に議論が盛り上がりました。先生方から「今までにない、密度の濃い研究会が出来てよかった」という声をいただけなのは、大きな収穫でした。

かつて私がそうだったように、1人では指導改善に限界があります。自身の経験を伝え、知恵を出し合うことで、更に授業がよくなっていく。そして、その過程が教師集団を一枚岩にし、生徒とぶれずに向き合い、育てていく力になると思うのです。先生方を引っ張る立場になったことには戸惑いもあります。それでも、主任1年目を終えた時に何か成果があり、私自身がやりがいを感じていることを目標に、自分に何が出来るかを考え、実践したいと思っています。

教科を超えた授業研究

柳澤先生の取り組み

◎他の先生に相談をし、授業研究を教科横断型グループで行うことにしました。授業を見る観点は、教科の内容ではなく、授業の進め方、教材の選び方、生徒への声掛けなど。指導の技を学び合い、改善できる場とするために、気付いたことを付せんに書き、事後研究会で議論しています。



授業の見学中に、よかったことは青、課題はピンクの付せんに書いておき、事後研究会でKJ法を使ってグループ分けし、他の先生が真似したいこと、課題を浮き彫りにしていった。

2012 Vol.2特集「主体的な進路選択—自らの意思と責任で決める力を育てる」へのご意見

このコーナーでは、編集部へ寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

*『VIEW21』中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト (<http://benesse.jp/berd/>) でご覧いただけます。

◎結果を出すために何をすべきなのか、学校現場では短絡的な発想で指導を進めている場合が多いと、特集を読み、反省させられました。体験が不足している生徒たちに、どのような見方、考え方を身に付けさせるのか、新しい視点で改めて考えていくべき内容だったと思います。

[千葉県/K中学校/O・H]

◎進路指導は大切だと理解はしていますが、そのどこに問題があり、どのように解消していったらよいのか、具体的な部分に切り込めないまま、中学3年間を修了し、卒業させているように思います。京都大・塩瀬隆之准教授の話の中で、「進路選択後の進路指導」で前に進む耐性を鍛えるということが強く印象に残りました。進路選択の指導に十分な時間を掛けても、挫折する生徒は必ずいます。モヤモヤを抱えながら前に進める耐性を鍛えるためにも、勤務校でも卒業生が後輩に語れる機会をつくってほしいと思いました。

[茨城県/U中学校/S・H]

◎京都市立大宅^{おおやけ}中学校の3年間の取り組みが、生徒の主体的な進路選択を促すだけでなく、それ以上の成果(表現力)を上げていることに強い関心を持ちました。特に、2年生でのポスターセッションの取り組みが、ねらい通りの教育

効果を上げていると思います。普段の生徒の生活にも効果が出ていることに感心しました。

[埼玉県/C中学校/O・H]

◎佐賀県鳥栖市立田代中学校の「マナー検定」が参考になりました。マナーについてはどの学校でも高校入試前に指導していますが、1年生の時から計画的に実施することの大切さとその効果を理解できました。検定の際には面接官として外部の人材を活用すれば、生徒には良い意味での緊張感が出ると思います。何を行うにしても、小中連携、中高連携、3年間の計画的、意図的、継続的な取り組みが学校現場には必要であり、体験活動を重視した進路指導、進路学習が、生徒の「必要感」「勤労観」「自己肯定感」を育むと思います。

[東京都/K中学校/W・F]

◎東京都福生市立福生第一中学校の「職場体験の訪問先を保育園や高齢者福祉施設に限定した取り組み」は、中学生にとっては、一般企業での体験よりも、勤労観を育て、自己肯定感を高める取り組みになると思いました。来年度からの本校の職場体験学習の参考にしたいと思います。

[三重県/H中学校/I・N]

Benesse教育研究開発センターのウェブサイトに **新コーナー「ベネッセ教育フォーカス」** を開設しました

Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでは、11月1日(木)に、新コーナー「ベネッセ教育フォーカス」を開設しました。第1弾の特集は「学びとデジタルの融合」、第2弾(12月上旬)は「幼小接続」(仮題)の掲載を予定しています。

当サイトでは、今まで以上に先生方に役立つ情報を提供してまいりたいと考えています。ぜひご覧いただき、さまざまな場面でご利用いただければ幸いです。

◎サイトURL <http://benesse.jp/berd/>

未来を生きる 子どもたちのためにできること

教育情報誌『VIEW21』が発刊当初から
変わらず貫き続けている思いです。

日本の学校教育は先生方の「熱意」が支えている。

だからこそ、我々も全力で

先生方に役立つ情報を発信することにこだわりたい。

『VIEW21』は、これからも

全国の先生方と共に子どもたちの未来を見つめ、

今と未来を結ぶ教育を提案していきます。

Benesse® 教育研究開発センター 『VIEW21』 編集部

編集後記

「とにかく量をこなせばいい」「ノートを丸暗記すればテストは大丈夫」。成績層にかかわらず、このような学習に対する考え方を持つ生徒が多いようです。学習において量をこなすことや必要な事項を暗記することは大切ですが、それ以上に間違いから教訓を得る、失敗から学び取ることがより重要だと思います。では、そうした学びの価値を生徒に伝えるためにどう指導していけばよいのか——。今回はこのような課題意識を持って「学び方」に関する特集を組みました。(佐藤)

VIEW21 中学版 2012 Vol.3

2012年11月8日発行/通巻第315号

発行人 新井健一
編集人 原 茂
発行人 (株)ベネッセコーポレーション

◎お問い合わせ先

VIEW21編集部
〒206-8686

印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸満
撮影協力 荒川潤、川上一生、ヤマグチイッキ
イラスト協力 カモ、幸剛

東京都多摩市落合1-34
電話 042-311-3391